

『ルーゴン=マッカール叢書』における空間描写の写実性と象徴性

野田 農

エミール・ゾラの『ルーゴン=マッカール叢書』における様々な空間の描写は、読者の眼には物語世界の構造を把握する上で見逃すことのできない写実性と象徴性を含んでいる。例えば、この『叢書』の多くの作品の場の記述に見られるように、その大きな共通点として、各空間の境界がはっきりしている事が挙げられる。『叢書』の一卷目の作品である『ルーゴン家の繁栄』では、その物語の主要な舞台となっている南仏の架空の町プラッサンはその周囲を古い城壁で囲まれていて、さらにその街の中自体も、三つの独立した地域で成り立っており、そのそれぞれの地区には貴族階級、ブルジョワ階級、労働者階級が暮らしている。ゾラはこの南仏の政治的対立が顕在化した街を、実際の執筆以前の段階で作者が常套的に行う地図の作製に基づき、主に街路を正確に描写する一方で、それらの三地区に色彩の対比や新旧の対比を描きこみ、政治的対立を空間の中に象徴化している。

『ルーゴン=マッカール叢書』における空間の描写は、写実性と象徴性とを兼ね備えた二重の構造を持った描写であり、一方には、物語世界の中にその舞台装置を写実的に表象しようとする試みがあり、もう一方には、その物語世界における空間に、物語のテーマと関連した何らかの象徴的機能を担わせようとする試みがあるように思われる。こうした空間の描写における二重性に着目して、この『叢書』を読み解くとき、そこには異なるテーマの間に共通して見られる作者の描写の技法が見出せる。そのような考えに基づき、『ルーゴン=マッカール叢書』の中でも、19世紀という時代に特徴的な場所を中心的な舞台とし、それらの描写に写実的側面と象徴的側面がよく表れていると思われる『パリの胃袋』、『居酒屋』、『ジェルミナル』といった作品を中心的に取り上げて、空間の描写に見られる二重性に着目し分析を試みた。

『パリの胃袋』における「中央市場」の描写は、物語の進展に伴い、植物的なイメージから、近代的な機械のイメージへと変容していく。それらは、現実世界を指示対象とした具体的な描写から、やがて「民衆の消化のためのボイラー」「金属の巨大な腹」といった機械的なイメージの比喻によって象徴的に捉えられている。『居酒屋』におけるアパートにおいては、その壁の描写には昼と夜の間では対照的な違いが見られる。昼の壁は「黄色い斑点に蝕まれて、屋根から垂れ落ちる雨水で何本もの筋目がついて」いるのに対し、夜の壁は「染みを洗い落とされ、影を塗りつけられ」ている。また昼のアパートでは多くの窓は開け放たれているのに対し、夜にはそれらの多くは閉ざされている。これは物語の時間的推移を反映すると同時に、ジェルヴェーズの内的なイメージとして、この人物の内面を反映しているように思われる。『ジェルミナル』におけるヴォルー坑の描写には写実的な記述が見られる一方で、物語の冒頭からこの炭鉱は「食欲な獣」といった象徴的な語彙によって

描き出されている。これには主人公エチエンヌが、ストライキの牽引とその成功によって労働者から政治活動家へとなるというはっきりとした目的意識を当初から抱いていることが関わっているのではないだろうか。本論考においては、こうした空間の描写の写実性と象徴性に着目し、それらの空間と登場人物との関係性、およびこれら二つの側面がいかに関わり付き物語世界の構築に寄与しているかを考察した。

マラルメにおける詩人と群衆

矢野 菜美子

19世紀のフランスにおいて、フランス革命以降主権を手にした大衆が教育の普及やメディアの発展によって芸術の世界と関わりを持つようになったことはよく知られた歴史的事実である。このような時代背景の中、1862年当時20歳のマラルメは『芸術家』誌の記事「芸術の異端 万人のための芸術」の中で、芸術や詩は神秘を宿すものであり芸術家のみがそれに通じることができるとして、大衆という門外漢への後期ロマン主義的軽蔑を顕にしている。しかし、1880-90年代に書かれた文明批評がマラルメ自身の手によって再編集され収められた散文集『ディヴァガシオン』(1897)を繙くと、そこでは社会的視座に立ったときの詩の理想的なあり方が舞台芸術論やメディア論を通して繰り返し考察されており、大衆蔑視の態度どころか、群衆という存在がポエジーの顕現にとって或はマラルメの詩人観を規定する重要な要素として捉えられていることに気付く。

この変化の原因としては、マラルメが1871年にパリに移住し大都市にうごめく群衆を発見したことや、ボードレー『パリの憂鬱』の散文詩「群衆」の中で説かれる群衆の詩学の影響、1880年代から顕著に見られるワーグナー歌劇の影響がこれまでに指摘されている。しかし、後期マラルメの文明論的視座における群衆観そのものを厳密に論じた研究はないと言ってよく、マラルメの群衆観がマラルメ詩学においてどのような意味を持つのかについて議論の余地が残されているように思われる。

そこで、今回の研究発表ではマラルメ晩年の著作『ディヴァガシオン』を取り上げ、群衆観が詩人の役割をめぐる問いと対になって考察されているという特徴を踏まえ、文明批評の中で考察される芸術受容の2つの型 — 舞台芸術と書物 — における詩人と群衆の関係に注目した。その際、重要と思われる3つの問題系 — 舞台空間・メディア・国家 — をそれぞれ代表する言葉として、*foule*「群衆」・*public*「公衆」・*peuple*「民衆」の定義付けを行い、これらの語の持つ社会心理学的・政治哲学的視点とマラルメの文明論的視座を比較した。そして、最後に批評詩「詩の危機」の分析を通してマラルメの群衆観が特にマラルメの詩論においてどのように位置づけられるのかについて説明を試みた。